

佐藤春夫「女誠扇綺譚」と港の記憶

——再説・禿頭港と酔仙閣——

河野 龍也

はじめに

本稿の内容は、実質上、『實踐國文學』第八〇号（二〇一一・一〇）に掲載された「消えない足あとを求めて——台南酔仙閣の佐藤春夫——」の続篇にあたる。稿者は二〇一二年八月二五日から三〇日まで台湾に滞在し、その間、二〇一一年二月に続く二度目の台南実地調査を行う機会を得た。台南は、佐藤春夫の代表作の一つ「女誠扇綺譚」（『女性』一九二五・五）の舞台である。このたびの調査で、前回確定できなかった禿頭港（仏頭港）の廃屋の現況を知ることができた。一方、旗亭・酔仙閣の所在については、その後未見の資料に触れ、複数の可能性を視野に入れて再考する必要がある。稿者は近年、佐藤春夫の台

湾・福建における足跡をたどり、関連作の分析に必要な註釈情報の蓄積を進めているが、本稿もその経過報告の一つである。

註釈情報の整備を続けることは、ややもすればトリビアリズムへと拡散し、表現に密着すべき文学研究の範疇から逸脱しやすい。しかし、異文化の地における見聞に基づいた春夫の「台湾もの」は、一九二〇（大正九）年の台湾・福建の時代状況と切り離して論じることが困難だろう。とりわけ「女誠扇綺譚」の場合、作中に現実の地名が織り込まれていることの意味を過小に評価してはならない。なぜなら、この作品自体が、まさに「土地の声をいかに聞くか」を問題化したものだからである。もちろん、実体としての土地とテキストが立ち上げる虚構空間としての土地とは区別される必要があるが、後者の特質を明らかにするに

あたり、前者の探求は比較対象を得る意味でも決して妨げにはならない。

本稿では、「女誠扇綺譚」という作品世界において、台南という土地や固有の地名、また現地文化がいかに重要な役割を果たしているかを明らかにするため、現在までに蒐集した文献と実地調査の成果を註釈的な情報として紹介したい。

一 禿頭港の廢屋——その現況について

「女誠扇綺譚」は、日本の植民地時代の台湾を描いた社会派推理小説である。台南の新聞社に勤めていた頃の〈私〉は、ある日漢詩人の世外民と一緒に、かつて対岸貿易で賑わった安平と台南西郊の港町（クツタウカン）を探索しに出かける。しかし、ジャンク船が輻輳していたはずの運河は、いまや干上がって見る影もない。そんな場所では二人は、巨大な廢屋を発見するのである。踏み込んで行くと二階から泉州語で女が呼びかけるので出てきたが、地元のお婆にそれは幽霊の声だと恐れられる。六十年前の一夜の嵐で没落し、家族を失った上、狂気のうちに餓死した船問屋の娘の霊が、今でも婚約者が来るのを待っている家だという。世外民はその伝説を恐れるが、〈私〉はただ生き

た女が男を待っていただけだと考える。その後はなくなると廢墟では男の首つり死体が見つかり、原因を作ったらしい「声の女」を糾弾しに出かけるが、その行動が女を死へと追いつめてしまう。女の正体は、内地人との結婚を主人に強要され、人目を忍ぶ恋人にも先立たれた、憐れな召使い（下婢）だったというのが作品の梗概である。

さて、「女誠扇綺譚」の廢屋探しは、戦前台南に住んだ内地人の文学愛好者には独特の吸引力を持っていたようだ。例えば前嶋信次や上原和は、台南西郊に作品の舞台を訪ねた経験を戦後になって懐かしそうに語っているが、とりわけ一九三七（昭和一二）年から一九四〇（昭和一五）年まで、台南州立台南第二高等女学校で国語の教鞭をとった新垣宏一はこの探索に最も熱中した人物である。新垣は、本島人生徒の通訳で「禿頭港」の廢屋を探し当てたり、春夫の友人で来台のきっかけを作った歯科医・東熙市の後継者（高野福次）への取材から、世外民のモデルの一人・前左営庄長の陳聰楷に辿り着き、春夫と台南を歩いた日の記憶を聞き取ったりしている。きわめて旺盛になされたその探訪研究の記録は、『台南新報』の後継紙『台湾日報』を発表の舞台として、「台湾文学艸録（十七）」（二〇）佐藤春夫のこと」（一九三八・一一・一）一六、「仏頭港記（一）」（一六）文学的遺跡を尋ねて」（一九三九・六・一

三〇・二二?）、「女誠扇綺譚」と台南の町（二）（六）（一九四〇・四・?（五・七）などの詳細な経過報告となつてあらわれ、『女誠扇綺譚』―断想ひとつふたつ―」（『文芸台湾』一九四〇・七）にまとめられた。

「禿頭港」の廢屋のモデルについては「女誠扇綺譚」と台南の町の記事が最も詳しい。新垣の調査によれば、その家の住所は入船町二ノ一六三。敷地南側には作中に描かれた銃楼が一基残っており、一九四〇（昭和一五）年当時は改造されて台南歴史館勤務の石陽睢宅になっていた。一九三三（昭和八）年頃、前嶋信次が撮影した改造前の写真が記事中には掲げてあり、正面が彎曲した形状で銃楼の特徴がよく分かる。石陽睢の談話では、ここは台南五條港の一つ新港墘シカンケンの一番奥で陳氏経営の私設造船所跡であり、地元では「廠仔チオンア」と呼ばれている。官設造船所の「軍工廠」、呉氏経営の「南廠」と並んでよく繁栄した。明治四十年の『南部台湾紳士録』²には、新港墘街四二番戸の薪炭業者・運送業者として「陳家滿」の名が見えており、取材当時は弟の陳家永の表札が、銃楼裏手の古びた二階家に懸つていたという。他に敷地内には陳姓の家が二三軒存在した。銃楼はもと北東南の三方にあり、西は港に面していたというが、石陽睢（一八九六―一九六四）の幼時には南の銃楼（後年の石の居宅）しか残っておらず、春夫が見たの

もこれであろうという。また陳宅のかつての中心には「代天府」の額を懸けた王爺廟があり、専ら陳一族が崇拝したものだという。以上が、春夫の訪問後二十年を経てなされた新垣宏一の調査記録である。

前回の現地調査では、日本統治時代の住所「入船町二ノ一六三」を知る術がなく、廢屋（の跡）にたどり着くことができなかった。しかし今回、岐阜県図書館で『地番入台南市地図』（昭和八年十月調査）の複写を入手し、現在の地図と照合することで、廢屋の場所を事前に特定することができた。その場所とは、台南市中西区民族路三段一七六巷一带――南北方向の金華路と東西方向の民族路との交差点から東北角の狭い路地を入ったあたりである。のちにこの隘路から振り返ると、交叉点の対角線方向にも同じ道幅の隘路が続いていることに気付いた（民権路三段二三四巷）。この道はゆるやかにカーブを描いて協進国民小学の裏手に到り、民権路の本道に合流して西に進路を変え安平に到る。つまり今の民権路がかつての旧運河本流であり、小学校の裏手が五條港の分岐点、そして民家の合間を縫う隘路が新港墘港の変わり果てた姿だったのである。

ちなみに、陳信安・許瑜芳⁴は、清代台南の三大造船所について次のように紹介している。官設「台澎軍工道廠」（軍工廠）は一七三五（雍正三）年、台南西北部（現在の

立人國小西側）に設立された。しかし一八二三（道光三）年七月の台風による台江閉塞で出船不能となり、一八四八（道光二八）年に市街西南部（現在の保安市場一帯）の臨海部に移転。旧廠を「北廠」、新廠を「南廠」と称したが、一八六六（同治五）年、福州船政局で鋼鉄軍艦の製造が開始されると、軍工道廠の本造軍船製造は衰退した。一方、民間船廠には新港墘陳家の「北小廠」と、南廠北頭里呉家の「南小廠」とが存在し、前者は「廠仔内」すなわち「民族路三段一七六巷」に存在したことが明記されている。

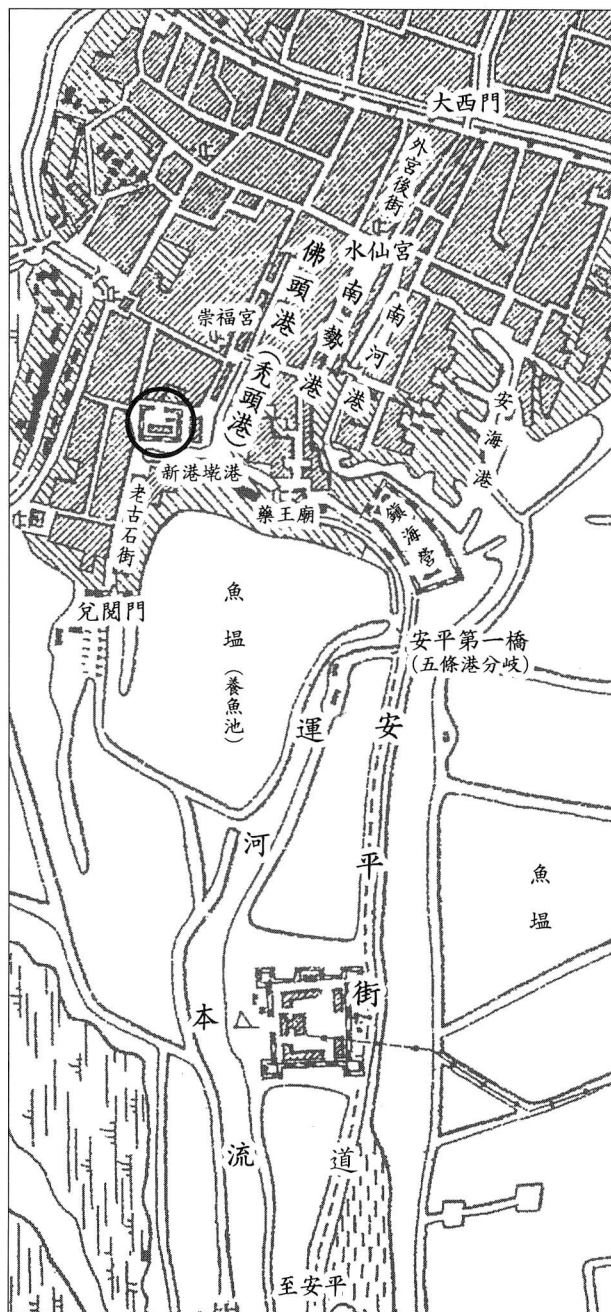
こうして廃屋の場所が分かってみると、「廠仔内」は新港墘と仏頭港とが最も接近する一帯に、二つの港道に挟まれて存在しているから、春夫と陳聰楷が西側正面から東の市内側（城西＝西門外で旗亭が密集した地帯である）へと歩いたならば、地名を仏頭港と取り違えることも十分起こり得たはずである。仏頭港の古称が「禿頭港」だったことは前稿に記した通りで、一九二〇年代にはこの地名がまだ残っていたらしい。

ここに、現役時代の「廠仔」の姿が偶然描かれた地図がある。下関条約締結後、日本の支配を拒絶して独立した台湾民主国の總統劉永福の逃亡から二日後、一八九五（明治二八）年一〇月二一日に台南に入城した日本軍が、占領直後に作成した縮尺二万分之一地形図『台南』（一八九六製

版、陸地測量部・臨時測図部）である（図1）。本図は原図の関連部分を左に九〇度回転させ、下方（西側）の安平から運河を伝って市街に進入する際の貿易船の視界をイメージしやすくした。運河をたどっていくと、市街地の西のはずれ、まさしく新港墘港の位置に、石垣で囲まれた構造物の存在が確認できるだろう。「廠仔」が銃楼をもつ武装船廠だったのは、富豪を狙う海賊の侵略に備える意味があったのだろうが、こうして見ると、運河の最も奥まった場所で防禦の便が図られる一方、海風を吸い込むように両袖をひろげた陳氏の屋敷は、貿易船の進路を導く恰好の目印であり、海上からは台南の門戸と見えたに違いない。地の利、水の便を活かした「廠仔」の立地を見ると、港の栄枯盛衰と切り離せない関係にあったことがよく理解できるのである。

さて、今回も前回と同様、地元出身の研究者・蔡維鋼氏の協力を得て、目指す「廠仔内」にスクーターで乗り付けた。二〇一二年八月二九日、雨雲の垂れ込めた午前一〇時すぎのことである。台南の郷土史研究に大きな足跡を残した石陽雄の住まいは、陳家南側の銃楼だったという。民族路の大通り沿いがそのあたりと見当をつけて観察すると、右から「明風理髮廳」「日新外語」「錦興農具廠」などの招牌が並ぶくすんだアーケードであった。その中に、新垣の

図1 一八九五測量『台南』の一部分（原図は国立国会図書館蔵。文字は追加。囲み部が廃屋のモデルとなった「廠仔」）



記事にある写真と同じ建物を探したが、取り壊されて久しいと思しく痕跡は見出せなかった。民族路三段一七六巷の路地に入ってみる。新港墘の港道だったこの場所は、「女誠扇綺譚」の時代ですらすでに、〈黒い土の上には少しばかりの水が漂うてゐて、浅いところには泥を捏り歩きなが

ら豚が五六疋遊んでゐるし、稍深さうなところには油のやうなどろどろの水に波紋を画きながら家鴨が群れて浮んでゐる〉⁶という惨状を呈していた。今は小奇麗な煉瓦プロツクの道になっており、路傍に規則的に並んだ鉄製の蓋は、港の跡を利用した暗渠の通風孔であろう。路地の中ほど右

手にある小さな祠に、「新港墘老古石境共福堂」という名が掲げてあるのを横目に進むと、道は入口から約一〇〇メートルの地点で東西に走る別の細道に突き当たった。一九二〇年代、空堀となった新港墘港もここで「廠仔」を巻き込むように右に折れ、すぐ先のところで止まっていたはずである。港道に沿って右折した東西の道には見覚えがあった。それは意外にも、前回我々が兌閤門から入って二時間近くうろついた信義街である。「生々蘭藝」の鳩屋敷も丁字路から塀ごしに目と鼻の先に見える。信義街を六〇メートル程進んだ路地を再び右折。新港墘に併走するこの裏道を一〇〇メートル南下すると、「明風理髮廳」の横から再び民族路の大通りに出た。いま時計回りに一周した一〇〇M×六〇Mの区画を陳家の敷地と見ると、「女誠扇綺譚」の〈私〉が計算した建坪一五〇坪という広大な廃屋は、この中にちょうど収まることになる。

とは言え現況は、コンクリート造やタイル貼の三層楼四層楼といった近代建築が、風雨に色あせた風情で立ち並ぶ平凡な住宅街である。取り立てて奇のある訳でもないこの一画をもう一度回って見たとき、蔡氏の注意で、東側の裏道の脇に、人が一人や々と通れるほどの狭い路地があることに気が付いた。道というより家の隙間である。幅一Mほどの曲折した隙間を奥に進んでみると、右側に朱塗の木柵

図2 陳家の遺跡「廠仔内代天府」は、狭い路地裏に人知れずある。



のある古風な廟がのしかるようにあらわれた(図2)。深い庇の下には「代天府」の額。扉の両側には「溫谷嚴格尊崇三府」「王道代天信仰王爺」と赤紙の門聯。木柵の間から暗い内部を透かし見ると、祭壇には黄金の瓔珞を戴いた赤面美髯の神像が安置され、背後の龕には「溫府王爺」の名を中にして、右に「陳府王爺」、左に「吳府王爺」の神名が金地の背景に黒々と浮き上がっていた。見上げれば、時代のついた漆引の扁額に「神通廣濟」と雄渾な金泥の四大字。それは「同治戊申年葭月穀旦」(同治七(一八六八)年十一月吉日)に「軍工職銜 陳進輝」が奉納したとある。ここは確かに、港と命運を共にした陳氏一族の家廟だったのである。

代天府の先は殺風景な空地だった。先ほどは気付かなかったが新港墘側にもやや広い抜け道があつて、空地は駐車場を兼ねている。この空地に面して東側は、屋根がすっかり崩落した二階建ての廃墟。また南側は、さらに古く見える平屋の閩南古厝であつた。台湾・福建に特有の、馬の鞍のような突起のある切妻屋根をこちらに向けた平屋の家には——しかし入口も窓もトタン板で塞がれて生活の匂いがしない。ここ二三十年内の建築と見える背の高い建物に見下ろされながら、「廠仔内」の中心にある二軒の破れ家は代天府とともに異彩を放っていた。写真を撮影して「廠仔

内」を立ち去ることにした。

三 「廠仔」の由来と五條港

以上が実地調査の概要であるが、その後、撮影した写真数葉から興味深い発見があつた。まず、平屋の家(図3)は古さびてはいるが、煉瓦造りの上に漆喰を塗り重ね、丁寧に壁仕上げが施されていたことである。(あの壁を「ごらん。あの家は裸の煉瓦造りではないのだ。美しい色です。つまり化粧してゐる」という世外民の言葉を髣髴とさせる造作である。また、切妻屋根のへりにT形とS形の裝飾金具がシンメトリーにつけられているのも特徴的である。これは「壁鎖」と言い、台南でも安平と赤嵌城(プロビンシヤ城)附近の古建築にしか見ることができない。黄天横が一九六〇年代に調査した段階でも、「壁鎖」を持つ古建築は台南市内に二〇ヶ所余りしか残存せず、その内二件の事例は「廠仔内」からの採取であつた。これは屋内の梁を外壁に固定する耐震構造としてオランダ伝統建築の特色であり、赤嵌城(ゼーランジア城)の城壁にも痕跡があることから、台南にはオランダ東インド会社の統治時代(一六二四―一六二二)に導入されたことが有力視されている。残存建築物の推定創建年代は、鄭氏政權時代の永暦年間(一六六



図3 廠仔内の閩南古厝。軒下の「壁鎖」が歴史を語る。

一台湾入府時（八三）から、清朝の康熙（二六六）一七二二）、嘉慶（二七九六）一八二〇）、道光（一八二一）五〇）、咸豐（一八五一）六一）、光緒（一八九五）一九〇八）年間、つまり一七世紀中葉から二〇世紀初頭の二五〇年間にわたると言う。⁹⁾ 平屋の家は、建築様式から見る限り、陳氏船廠の一部と見て不自然ではない家だったのである。

次に、二階家の写真（図4）を確認すると、正面半分（写真左側）は後からの増築であるが、奥の半分はやはり閩南式の鞍部を持った瓦屋根で、S字の「壁鎖」も軒下に見える。さらに注目すべきは、側面入口附近の壁の漆喰が剥落し、その中から煉瓦と老古石を積んだ躯体が覗いていることである。老古石は澎湖島を主産地とする珊瑚化石で、当地では喫水の浅いジャンク船の重しによく利用された。新港乾街の西隣にある「老古石街」は乾隆年間の城池図にも名が見える古街であるが、石陽雖はその由来を、家屋や塀の建材に老古石を多用した地域だからと説明している。¹⁰⁾ この二階家もまた、旧時代港町の建築文化に連なる遺跡だったのである。正確な建築年代については、郷土史研究の進展に期待するほかはないが、平屋の古厝とともに、春夫来南当時存在した可能性がある。

陳氏の「廠仔」に関する考証は、台南市文献委員会が一

図 4

二層楼の廃屋。一階カマボコ形の入口脇に積み上げた老古石が見える。



九五三年一二月から翌一月にかけてこの地区で行った聞き取り調査が唯一詳細なものである。その記録「採訪記」^①には新垣の記事に見えない内容も若干含まれている。廠主陳氏の祖籍は泉州府晉江県南門外十九都圩頭郷。神牌によれば、大陸の一世は逸名、二世朝和公（開台始祖）、三世廷午、四世進輝、五世友義（軍功五品、諡純朴）、六世澤明・澤和、七世家滿・家永、そして八世を迎えて（家道大落）、一九五三年の年少世代で九世を数えたが、陳氏の大厝（主屋）はすでに売却され他人の所有に帰っていた。陳氏は代々夭折の家系で肺疾の遺伝が疑われるという。一族末裔の老婦人は、半世紀前の結婚時、「廠仔」はすでに造船業を廃業していたこと、船廠はかつて「南埕廠」とも呼ばれたこと、道路側（南）主屋背面（東）港側（西又は北）に銃楼が存在したことを証言している。また、七一歳（二八八四年生）の黃得老人は、「廠仔」の元塗装職人で、同廠では最大三百石積みの木造船を製造したことがあり、常勤の職人は十数人で繁忙時に臨時工を雇ったこと、一人前になるのに船廠で三年四か月の見習い期間があったこと、給金は潤沢で生活に不安はなかったこと、職人集団の儀礼についてなど多くの証言を行っている。

以上の記録によれば、「廠仔」は春夫が訪問する約二〇年前の一九〇〇年前後には廃業していたことになる。「女

「誠扇綺譚」が説く「没落」は一八六〇年頃に設定されており、陳家を（沈家）と変更した点とともに虚構化が働いている部分である。また、豪商の祖先が泉州出身ということでは一致するものの、入植先を阿罩霧（現霧峰）とする点は、後年の文章に、〈女誠扇綺譚の建物や安平の風景は実景のつもりである。その他は中部地方での見聞に空想を雑へて作つた〉とある通りで、霧峰林家の由来が元になっている。さらに、〈沈は本当に安平港の主だつたと見える。

——沈家が没落すると一緒に、安平港は急に火が消えたやうになりました〉という一節が示すような、人（一族）場所（港）モノ（建物）を一つの運命に結びつける世界観は、ポーの「アッシャー家の崩壊」からの撰取の跡が著しいが、そうした文学的な世界観の採用を促したのは、安平と五條港そして陳家一族と船廠との没落の運命を見聞した台南での体験に他ならない。

この節の最後に、五條港の歴史について一覽しておきたい。世外民が作中で参照している絵地図「台湾府古図」は、一六八三年に清朝が鄭氏政権を打ち破り、台湾を版図に組み込んだ康熙年間（一七〇四以前成立）に基づくものである。安平港外「七鯤身」と称する七つの砂洲と、台湾府城（つまり今の台南）にとり囲まれた潟湖である台江は、静かな入江で天然の良港を形成していた。し

かし、周囲の地形は一八二三（道光三）年の台風で激変。台江の半分が土砂で埋まり、沖合一里にあった一鯤身上的安平と台南とは一部地続きになってしまった（台江閉塞）。このとき港湾の利権を管理していた商人組織「三郊」が、

安平から台南に到る水路を改めて開いたのが五條港の発祥である。もともと、一七五二（乾隆一七）年の『重修台湾

県志』（王必昌編）所載「台湾府城城池図」には、「老古石」「閩帝港」「媽祖港」の名とともに後に仏頭港となる水路と、「北勢街」の名とともに南勢港となる水路が見えて

おり、五條港は旧来の港道（運河）を修復整備したらしいことが分かる。水路は市街手前の「安平第一橋」（二重橋）

附近で五つの港道に分かれ、城西の商業区の奥深くまで達していた。現在一般に五條港と唱えるのは、北から順に新

港墘港、仏頭港、南勢港、南河港、安海港の五本の港道で、この附近には今でも、船の積荷を陸揚げする仕掛けと

して二階に扉を持った木造の商家建築が数多く残っている。日本の占領後、台湾総督府は一九〇七（明治四〇）年

から総工費二九万円をかけ、一四年計画で港内浚渫事業を展開したが、安平の北に河口を持つ塩水溪の土砂と風浪に

より港の埋没に歯止めがきかず、港道幹線も年ごとに移動するという有様だった。そこで一九二二（大正一一）年、

別に総工費七五万円を予算として新運河開鑿工事を開始、

一九二六（大正一五）年の開通式を迎えるにあたって、五條港は歴史的使命を終えた。¹⁸ 港道は戦後まで排水溝などとして細々と痕跡をとどめていたが、現在ではそれも暗渠化され、地上から水路の名残は全く見出せなくなった。台江跡の広大な魚塭（養魚池）も埋め立てが進み、いま旧五條港地区は、最寄りの海岸線から五キロ以上も隔たった内陸にある。

四 「酔仙閣」再考

「女誠扇綺譚」に登場する旗亭「酔仙閣」について、前回の稿では春夫来南時に永楽町三丁目——薬王廟街に存在した可能性が高いことを示唆した。しかしその後蒐集した資料により、再考の必要に迫られている。いまだ確実な結論には至っていないが、現時点で判明している点と、いまなお不明な点との別を明らかにしておきたい。

実在の「酔仙閣」に関する問題は、さしあたり次の三点である。①創業年代は一九二〇（大正九）年以前にまで遡れるか、②永楽町店舗の正確な位置はどこか、③西門町店舗への移転はいつか。

まず、「酔仙閣」の創業年代について、国立国会図書館所蔵の商工名鑑を調査した。戦前台湾の本島人経営の店舗

情報を含むものは、A『大日本商工録』昭和三年版、B『台湾商工名鑑』昭和四年版、C『大日本商工録』昭和五年版、D『大日本商工録』昭和六年版、E『大日本実業商工録』台湾版、昭和六年度、F『帝国商工録』台湾版、昭和七年度第二版、G『大日本実業商工録』台湾版、昭和七年度の七種である。¹⁹ 残念ながら大正期以前の台湾商工名鑑は見出せていない。「酔仙閣」に関する記載内容は次の通りであった。

A 高金溪 台南市永楽町三ノ一二（営業税）二三四

B 酔仙閣 高金溪 台南市永楽町二ノ一三（電話）三七二

C 酔仙閣

台南市永楽町三丁目一二 台湾料理

（創業）大正十年（営業税）二八八

店主 高金溪（電話）三七二（取引

銀行）三十四、彰化

D 酔仙閣 台南市永楽町三丁目一二 台湾料理

（創業）大正十年（営業税）二八八

店主 高金溪（電話）三七二（取引

銀行）三十四、彰化

E 酔仙閣 台南市明治町三丁目 台湾料理・会席

（創業）大正十年 店主 高大水（電

話）三七二（取引銀行）三十四、彰化

F 高大水 台南市明治町三ノ一六六（営業税）二

九三（所得税）四七

G 醉仙閣 台南市西門町四丁目 台湾料理業・会席

（創業）大正十年 店主 高大水（電

話）三七二（取引銀行）三十四、彰化

一九三〇年前後（昭和初期）の段階で存在した台湾料理店いわゆる「本島人旗亭」について最も詳密なのはBで、台南では「醉仙閣」のほか「西蒼芳」「宝美楼」の名が見える。しかしその他の商工名鑑は内地人店舗の紹介が主体であり、「西蒼芳」「宝美楼」に関しては店舗名を挙げず、経営者名に住所その他を二行割注で示しているに過ぎない（ACDEF）。一方で「醉仙閣」は、CDEGで六・七行という破格の扱いになっているほか、Gに至っては台湾全島でわずか十一店舗しか収録されていない料理屋の一つに挙げられている。内地人の需要も視野に入れた順調な経営展開を証するものだろう。

問題は、CDEGで「醉仙閣」の創業が一九二一（大正一〇）年とされている点である。これを事実とすれば、春夫来南時に「醉仙閣」は存在しなかったことになる。そこで地元紙『台南新報』に開業広告を探したが、同紙を唯一所蔵する台南市立図書館にも一九二〇年以前の発行分は残されておらず、一九二一年分の所蔵も五・六・九・一〇・

一一・一二月発行分に限られ、この中から開業広告その他は発見できていない。管見では、前稿で紹介した一九二二（大正一一）年一月一日付『台南新報』の年賀広告（大歓迎忘年会新年宴会／台南市永楽町参丁目拾貳番地／支那料理店 醉仙閣／高得／設備改良、価格大勉強、嶄新御料理提供、貳百名以上の宴会は引受致候、特に御客様の御求めに応じ申候）が、今のところ「醉仙閣」の存在を確認できる最古の資料ということになる。

「醉仙閣」は果たして、一九二一年以前には存在しなかったのだろうか。それとも、正式の営業許可が営業形態の更新があったのが一九二一年であって、店舗自体はそれ以前から存在していたのだろうか。気にかかるのは年賀広告の《設備改良》の文字で、前年開業らしくないことである。また当時の『台南新報』には本島人読者むけに漢文欄・漢文広告も存在したなかで、明らかに内地人顧客の獲得を目指した年賀広告の《設備改良》の文字は、本島人専用の旗亭からの方向転換を含意したものと読めなくもない。

以上のように、「醉仙閣」が商工名鑑記載の創業年代以前に遡る可能性を考えているのは、「女誠扇綺譚」に登場する旗亭の名に「醉仙閣」と台湾語の発音でルビが振られていることを重視するからである。本作に現地語のルビ

が付された語彙を列挙すると、「醉仙閣」以外には「禿頭港」^{クツタウ}「安平港」^{アンピン}「安平」^{アンピン}「安平魚」^{アンピンヒョ}「赤嵌城」^{シヤカムシヤ}「舢舨」^{サンパン}「龍眼肉」^{ゲンゲウ}「走馬樓」^{ツマウヘラウ}「泉州人」^{ツェンチヤウ}「厦門」^{エイムン}「泉州」^{ツェンチヤウ}「戎克船」^{ジヤクセンク}「漳州」^{フウツァウ}「廣東」^{カント}「胡蘆屯」^{コロトン}「鹿港」^{ロツカン}「芸者」^{ゲイトア}「玉葉仔」^{クワンナム}「汝來仔請坐」^{ニライアチンツォ}の二三例があり、複合語の重複を除けば一八例、そのうち地名の一例はすべて実在のものである。前嶋信次の回想から、「禿頭港」^{クツタウ}は春夫が現地で聞いた地名をそのまま作品に盛り込んだことが窺われるが、「醉仙閣」^{ツイセンコ}も同様に考える方が自然ではないだろうか。台湾語の読みも含めて全くの空想から「醉仙閣」^{ツイセンコ}という旗亭の名を生み出すことは至難の業であろう。

なお、永楽町店舗の所在地を、前稿では「葉王廟街」としたが、一九二九年版の商工地図「大日本職業別明細図 No. 一七〇台南市」^②によって判明したその場所は、「葉王廟街」よりも東の「外宮後街」の一角である。ここに前稿の内容を訂正しておきたい。「外宮後街」は航路安全の水神を祀り、媽祖廟とともに台湾では港町の象徴的な存在である水仙宮の背面（東側）にあった街で、場所は大西門の真向かいになる。安平街道の起点として、清代末期には台南で最も栄えた地域だった。しかし、一九〇〇年代に城壁が除去されて南北に西門路が貫通し、また一九二〇年代後期に西の港町通り（現民権路三段）が拓かれて、市内中心か

ら本町通りを経由し、安平に達する直線ルートが確立すると、物流経路から外れた旧外宮後街は完全な裏店になった。商工地図で見ると、昭和初期の「醉仙閣」は隣接する「西薈芳」とともに、本町西門町の大交叉点の蔭に隠れた細道の上に描かれている。附近は現在「宮後街」の古名を回復しているが、この場所を訪ねてみると、往時台南の西正面にあたる街道筋が、僅々五メートル程度の道幅であることに改めて驚かされるのである。

商工名鑑の記載により、「醉仙閣」の西門町移転は一九三二（昭和七）年前後ということが分かる。これに先立ち、一九二九（昭和四）年九月二一日付『台湾日々新報』七面には、「西薈芳や醉仙閣等／一流料理店に厳命／来春三月迄に移転又は新築せよと／台南警察署の大英断」と題して次の記事もあった。

（台南警察署は十日朝）本島人料理店として一流と称せられてゐる台南市永楽町三丁目の西薈芳及醉仙閣に對し来る昭和五年三月末までに移転又は新築をなすべしまた一箇月以内に現在の家屋にして危険の箇所及非衛生的の便所等につき相当の修理を加ふべし然らざれば営業許可を取消との痛烈な命令を發した。

この際の命令が移転の原因となったものかは不明だが、一九三二（昭和七）年七月二日付『漢文台湾日日新報』四

面には、[▲]台南市醉僊閣旗亭。這番為移転末広町。訂明三日星期。午後六時。招待官紳各界。在同所開移転披露會^②。の記事が見え、末広通り（台南銀座^マ現中正路）角地に位置した西門町新店舗の開店を指す記事と思われる。商工名鑑のEとGで、明治町三丁目の地名が挙げられている詳細も確かではないが、あるいはこれが一九二九年の警察署命令による一時移転先だろうか。現在のこの場所（中西区成功路二八五巷三号）には高氏経営にかかる旗亭「広陞樓」の建物が保存されており、家族もここに住んでいた時期があるということから、商工名鑑の記載は経営者の自宅住所を記した可能性も考えられる。

五 芸姐と文人——旗亭という空間

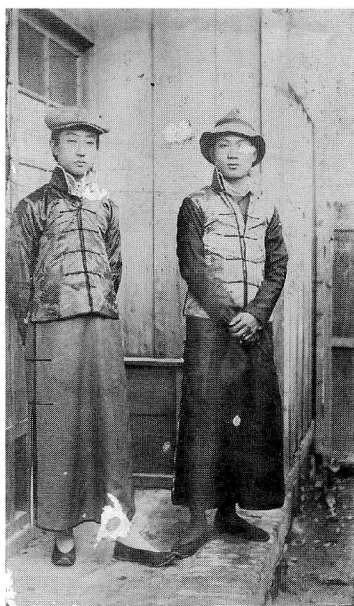
「女誠扇綺譚」には「醉仙閣」の店内に関する描写はないが、ここへしばしば立ち寄るという〈私〉と世外民の酒席がどのようなものであったか分かる箇所がある。それは〈私〉が廃屋の声について一くさり推理を述べた際の次の言葉である。

あそこへは全く近よる人もないと見えるね。そのくせあの家は、女ひとりで行つても何も怖ろしい事もないほど、異変のない場所なのさ。若い美しい女

——芸者の玉葉仔のやうな奴かな。いや、若い女でなくつて——^②

資産家の世外民が出資する二人の宴席には、芸妓が呼ばれることもあったようなのである。ちなみに「玉葉仔」とは実在の芸姐の名と思しく、『南方紀行』の「鷺江の月明」章に、〈台湾の歌妓たちの名を聞いて、記した〉ものとして、「柑仔」「却仔」「阿招」「錦仔」「玉葉」「宝玉」「宝青」「宝蓮」の名が、厦門の歌妓たちの名と比較されている。^③新垣宏一は、〈一夜本島人の青樓見物に出かけたが、室内の暑さに閉口した春夫は「電扇はないか」と部屋中を見まはしながら言つたさうであるが、当時は未だ台湾には

図5 (左) 若き日の陳聰楷 (陳錦清氏提供)



電扇といふものがわづかしが見られない時代であつたので、これは陳氏の強い印象となつてゐる⁽²⁴⁾という陳聰楷(図5)の証言を紹介しており、これらをあわせて考えると、「女誠扇綺譚」や『南方紀行』に垣間見えている台湾教坊(花柳界)の消息は、陳聰楷の案内による台南での取材が活かされた可能性が高い。

台湾総督府新庁舎会議室の壁画制作でも知られる太平洋画会の石川寅治(一八七五―一九六四)は、春夫来南の三年半前、一九一七(大正六)年二月前半の二週間を台南の旅館四春園に過ごし、ある日スケッチのため〈台南日日新聞〉(台湾日日新報支社または台南新報のことか)の記者・呉宴珍の案内で〈当地一流の料理店といふ醉仙楼〉に出かけている。その折の記録は大正中期の「本島人旗亭」の雰囲気をよく伝えるものであろう。

醉仙楼と云ふのは名流にも似ず、頗る固陋な汚ならしい建物の料理屋であつた、何れを見ても好個の部屋らしいものはなかつたが、其中で画を描くに最も適した部屋を選んで、兎も角も酒肴と美人(台湾芸者)とを命じた、聽て此の席に侍したのは罔腰^{ぼんえう}と云ふ年齢漸く十八歳位の色の白い、皮膚の美しい小柄な女であつた。頭髮を右横でびつたり分けて、後の領首の所で束ねて結んで居る、前から之を見ると、丁度男が髪を分

図6

芸姐は伝統音楽の継承を担い、文人と漢詩の応酬をする者もいた。写真には纏足が写っている⁽²⁵⁾。



けて居る様に見えた、襟の高い黒地に綾のある緞子の衣服を着、耳朶に宝玉を点じ頸に金鎖を掛け手に金環を嵌めて居る、之は本島に於ての最も瀟洒な、所謂ハйкаツた装であるとの事であるが、それで足を纏足して居ない処を見ると、新しい女たることを証明して居るのであつた。此の女は客を遇することが非常に巧妙で、時々片語の内地語を交へて盃を強いる処などは、余程内地化して居る様に思つた⁽²⁶⁾

「酔仙楼」は城内大西門辺の竹仔街（本町三丁目）にあつた唐氏経営にかかる台湾料理の名店で、一九〇七（明治四〇）年には新聞にその名が見えるが、一九二〇年代には急速に経営状態が悪化したらしく、『台南新報』一九二一年六月一日六面漢文欄には「▲酔仙楼維持声価」と題して経営再建に関する記事が出ている。しかしともかくこの頃までは〈南部著名料理店〉であり、〈饌精美設備完全都人士恒藉為宴遊之所〉として声望が高かつたようだ。石川の文章に見るごとく、「酔仙楼」のような台南の旗亭は芸姐の居住空間でもあつて、芸姐は需めに応じて出局し、琵琶と歌によつて宴席に華を添えたのである。その主な顧客は地主や豪商で漢学の素養がある知識人も多く、石川は案内した呉宴珍もまた「南社」の詩人だった。「南社」とは、当時台北の「瀛社」台中の「樸社」とともに台湾三大

詩社と称された台南の漢詩結社で、一九〇六（明治三九）年創立。その詩会は大西門内外（城西）に集中していた酒楼・旗亭で挙行されるのが常だったという⁽²⁸⁾。台南の旗亭は、単なる居酒屋ではなく、芸妓の音楽を愛で、詩琴酒を楽しむ地元漢詩人の風雅の拠点としての意味をも担っていたようなのだ⁽²⁹⁾。

閩南音楽「南管」の研究家で、自身も南社同人であつた許丙丁（一九〇〇～一九七七）の回想によれば、航路安全の神・水仙宮を中心とする城西地区は、清代当時台湾第一の商業区であつたばかりでなく、茶楼酒肆櫛比し、夜ごと弦歌嬌声に湧きかえる歓樂地として、最盛期安平港の財力をたつぷりと吸引した場所だった。晩清（日本時代初期）には「娼寮四美人」と称する珍珠・喜鵲・玉鳳・玉璫を輩出し、それぞれ陳雨三（進士陳望曾の弟）・施士洁（進士）・李昭三（阿片豪商）・許南英（進士）ら名紳豪商に見初められている。降つて一九二〇年代、台南の芸姐には文人名士から贈られた書画・対聯を自室に飾ることで自らの声価を顕示する習慣があつたという。南社の詩人は往年の文人の風流にも劣らず、城西の花街にあつて〈吟風弄月、縦情詩酒〉——思うさま詩を吟じ酒を飲み、薄命の芸姐のために数多くの名文対聯を生み出した。自ら詩を作り文人と応酬する台北出身の「詩妓」王岡市（香禪）が一代の名

妓として台南教坊に喧伝されたのもこの頃である。⁽³¹⁾ 詩と音楽とを通じて文人と芸姐とが交流するこの文化的伝統は、趙雲石・連雅堂ら南社の同人が中心となつて発行した文芸紙『三六九小報』（一九三〇年九月九日）一九三五年九月六日、台南三六九小報社）にも顕著で、台南各詩社の作品を常時掲載したほか、写真と讀を添えた名妓評判記「花叢小記」を常設欄とし、創刊号以来五年間で二九〇名の芸姐を取り上げるといふ力の入れようだったのである。

日本統治期に旧知識階級がこぞつて花街に出入し芸姐との交流に日を送つた背景について、「花叢小記」の詳細な調査を行つた向麗頻は次のように指摘している。当時台湾中南部の指導者は大半が世襲地主層であり、花街で多額を費やす強大な経済力を持っていたほか、その多くが伝統的な漢学の教育を受けた知識人であり、文化的・民族的なアイデンティティーから中国大陆の影響を強く受けていた。一八九五年日本の台湾統治時代に入ると、これらの知識人たちは強烈な民族意識に駆られ、あるいは抑圧を受けて捌け口が見出せず、自然やみがたい憂悶の情を鬱積させた結果、「同ジクハ是天涯淪落ノ人」（白楽天「琵琶行」）の感を芸姐に抱き花街で詩酒に耽る放蕩生活を送る者も多かったのだという。⁽³²⁾

して見れば、「女誠扇綺譚」に「醉仙閣」という旗亭が

登場することの意味は極めて大きい。それが現実の「醉仙閣」と重なるか否かはともかく、城西に軒を連ねる旗亭の一つに違いないそこは、芸姐との交流を含め、世外民にとっては安平港の繁栄期を辛うじて今に偲ぶことのできる懐かしい空間だったに相違ないからである。「醉仙閣」にしばしば立ち寄り、時には「玉葉仔」が奏でる琵琶に耳傾けながら、詩を吟じ美酒に時を忘れる。日本の台湾支配に対する世外民の〈反抗の気概〉は、何も〈統治上有害〉と危険視されるような漢詩を新聞に投稿するという直接的な形にのみ表れてくるのではない。「醉仙閣」に入り浸るといふその行動自体もまた、世を捨て世に捨てられた棄民を自負する「世外民」の、鬱屈したブライドの表現だったのである。それにしても、本来なら対極的な立場にあるはずの〈私〉を、そうした台南漢詩人の取つておきの隠れ家につきも招き入れていたということが、世外民の〈私〉に対する友情と信頼を何よりも証明している——〈私〉がそのことに気付いたかどうかは別として。

土地の歴史が囁きかけるかほそい声に耳傾け、過去の幻影を眼前に呼び起こそうとする世外民が、その日の歴史散歩を旗亭で締めくくるといふのはいかにも意義深い行動である。それ自体が水仙宮に守られた港町台南の栄光の名残を探る歴史散歩であり、伝統的な文人として祖先の土地に

繋かれた絆を再確認する行為であったからである。「女誠扇綺譚」はこのような形で、一九二〇年前後の台南に実在し、やり切れぬ思いを抱いて詩琴酒の風流に身をやつしていた数多くの「世外民」たちの横顔を、今に伝えているのである。

付記 今回の現地調査で充実した成果が得られたのは、安平出身の蔡維鋼氏の多大なご配慮とご協力の賜物です。祖父君の写真(図5)をご提供下さった左營の陳錦清氏には、お忙しい中再度面会の折を設けていただき忝くも有難く存じます。国立国会図書館には資料掲載(図1)のお許しをいただき、公益財団法人日台交流協会には資料閲覧の便宜を賜りました。皆様に謹んで御礼申し上げます。なお本研究は、JSPS科研費22720078の助成を受けものです。

註

(1) 前嶋信次は島田謹二との対談で、〈台南にも数年住みましたが、その頃はよくあの小説の筋をたどっては、その跡を探し歩いたものです。(略)東京へ来ましてから、竹田竜児先生が佐藤先生の甥でいられるので、そのついで私も先生のお宅へ伺いまし

た。それは確か昭和二十七年、八年のころであります。それでどうもあの、禿頭港というところは見つからないのですが、もしや、仏頭港のことではありませんかとおたずね致しました、先生は「いや確かにあれはクッタオカンだった」とこう言われました。奥様がそばで聞いておられて、「あなたがあのようなものを書かれたので、皆さんが迷惑していられるんですよ」と言われましてね(笑声)」「(対談・佐藤春夫における東洋と西洋』『三田評論』一九七〇・八、七頁)と述べている。また上原和は国分直一との対談で、〈中学の一年の時に読みまして、学校の帰りにずっと廃港の台湾人街の方にその小説の舞台を探しに行きまして、それですっかり迷子になってベンをかいいたことがあります。その『女誠扇綺譚』を読むことによつて、台南の港である安平とその対岸にある一衣帯水の福建省の泉州との間に非常に密接な船の往来が昔からあったことがよくわかりました〉(『海上の道と古代史』『東アジアの古代文化』一九七八・一、二三―四頁)と述べている。なお、台南居住者ではないが、戦後の探訪録には許丙丁の案内を受けた太田三郎の「佐藤春夫『女誠扇綺譚』の舞台」(『群像』一九七一・三、二六二―三

頁)があり、廃屋の詳細についての記述はないものの、港の変遷を知ることができる。

- (2) 『南部台湾紳士録』(一九〇七・二、台南新報社の記載は、新垣が収録している通り。〈陳家滿 台南第三三保々正、薪炭行、貨物運送及舢舨運送業、新德美号、台南新港墘街二四番戸〉(五一頁)。

- (3) 中島新一郎『地番入台南市地図』(昭和八年十月調査・縮尺六千分之一、一九三三・一二、竹中商行・橋本商店)。

- (4) 陳信安・許瑜芳「百様行業領風騷」(范勝雄等編『長河落日圓・台南運河八十週年特展圖録』二〇〇六・一一、台南市文化遺產保護協會、四一―二頁)。

- (5) 蔡維鋼氏には「女誠扇綺譚」を美学的見地から論じた研究論文「佐藤春夫と〈荒廃の美〉について——「田園の憂鬱」と「女誠扇綺譚」をめぐる」『成蹊国文』二〇一一・三、一二八―一四二頁)がある。

- (6) 『定本佐藤春夫全集』第五卷(一九九八・六、臨川書店、一五二―一五三頁)。

- (7) 「代天府」に関しては、次の記録がある。〈所在入船町二ノ一五八／教別 儒教／祭神 温王爺、陳

王爺、呂王爺、高夫人／創立 約百年前(不詳)／信徒 十四人／例祭 旧暦一月十五日、五月十五日、八月十五日／管理人 永楽町二丁目 陳家滿／財産 不詳／沿革 本廟は陳家滿の家廟にして同人が現住宅を建築の際其一棟を廟としたものにて建立上特記すべき縁起などある筈なし祭神の温王爺は泉州より之を迎へたるもの、如きも他は陳家が支那在住中奉祀したるものを渡台に際し平安を祈る為め奉じ来りたるものなるべしと伝へらる(相良吉哉編『台南州祠廟名鑑』一九三三・一二、嘉邑城隍廟附設慈善会、二九頁)。

- (8) 『定本佐藤春夫全集』第五卷(一九九八・六、臨川書店、一五四頁)。

- (9) 黃天横「臺南的壁鎖」(中國文化學院臺灣研究所編『臺灣文物論集』一九六六・一一、中華大典編印會、三〇三―一二頁)。

- (10) 石陽睢「西區拾遺」(季刊『臺南文化』一九五四・四、臺南市文獻委員會、三四頁)。

- (11) 臺南市文獻委員會編纂組「採訪記―西區採訪初録」(季刊『臺南文化』一九五四・四、臺南市文獻委員會、六三―五頁)。

- (12) 「採訪記」では、ここから一世代を二五年として

試算し、二世朝和公の渡台を乾隆中葉（一七六〇年代）と推定。また五世友義の軍功五品を道光一〇

（一八三二）年の張丙の乱平定に関連づけているが、四世進輝が代天府の扁額を奉納したのが同治七（一八六八）年であることに鑑みると、疑問が残る。扁額を根拠にするなら、陳家の一世はより短くなる。

- （13） 佐藤春夫「かの一夏の記——とちめがきに代へて——」（『霧社』一九三六・七、昭森社↓『定本佐藤春夫全集』第二卷、一九九九・五、臨川書店、二二六頁）。

- （14） 『定本佐藤春夫全集』第五卷（一九九八・六、臨川書店、一五八頁）。

- （15） 注5蔡前掲論文に図版が紹介されている。

- （16） したがって、「台湾府古図」が描く康熙年間に禿頭港（仏頭港）の地名が成立していたかは疑わしい。戦後出版された新装版『女誠扇綺譚』（一九四八・一一、文体社）は、表紙装画に「台湾府古図」を用い、原図にはない「禿頭港」の文字を書き加えているが、実際の禿頭港とは異なる場所を指しており、飽くまでもデザインとして理解すべきものになっている。

- （17） 詹翹・范勝雄・何培夫・曾國棟・吳炎坤著『臺境

之南——府城地名的故事』（二〇一〇・一〇、台南市文化資産保護協會、九頁）。

- （18） 日本領台以後の没落事業概要は、「今日開通式を挙る台南新運河は斯くして出来た」（『台南新報』一九二六・四・二五、五面）に拠る。

- （19） A高瀬末吉編『大日本商工録』昭和三年版（一九二八・一一、大日本商工会、台湾四八頁）、B台湾通信社編『台湾商工名鑑』昭和四年版（一九二九・三、台湾通信社、二〇頁）、C高瀬末吉編『大日本商工録』昭和五年版（一九三〇・七、大日本商工会、台湾一九四頁）、D高瀬末吉編『大日本商工録』昭和六年版（一九三一・三、大日本商工会、台湾一九四頁）、E山田仙八編『大日本実業商工録』昭和六年度（一九三二・六、大日本実業商工会、台南州三四頁）、F常岡恒子編『帝国商工録』台湾版『昭和七年度第二版』（一九三二・六、帝国商工会、一四〇頁）、G岡田源喜編『大日本実業商工録』台湾版『昭和七年度』（一九三三・三、大日本実業商工会、一五頁）。

- （20） 木谷花「大日本職業別明細図信用案内No.一七〇台南市」（一九二九・六、東京交通社）。范勝雄編『昨日府城・明星台南——發現日治下的台南』（二〇〇

七・一二、台南市文化資産保護協會)の中扉に収録されたものを参照。

- (21) 真杉静枝は一九四一年晩春にこの西門町店舗を訪れ、店内の様子を『南方紀行』(一九四一・六、昭和書房)に詳しく記している。「醉仙閣」はこの町で一流だといふ本島人料亭」として紹介され、入口に店名を書いた板の額が懸り、一階では胡絃を伴奏にした〈大陸的な〉男声楽団の演奏があった。その後、裏口の〈芸妓部屋〉で指名した〈梅花〉と、後に宝美楼から到着した〈台南一の芸妓だといふ『月華』の二人を招き、〈北京あたりから来た歌劇の中の一節〉(京劇の歌詞、すなわち北管であろう)を聞いたという。真杉は、芸妓の旗袍の官能性を讚美している(一五六―七頁)。

- (22) 『定本佐藤春夫全集』第五卷(一九九八・六、臨川書店、一六六頁)。

- (23) 『定本佐藤春夫全集』第二七卷(二〇〇〇・一一、臨川書店、四五頁)。

- (24) 新垣宏一「女誠扇綺譚」と台南の町」(三)『台湾日報』一九四〇・五・一)。

- (25) この絵葉書には裏面に手書きの解説がある。全文を以下に転記する。〈台湾の芸者を唱書妓と云ふ。

唱書妓は十才頃より十六七迄を限度とし其以上になると嫁入するらしい。琵琶の形をしてゐるのは妓が用ゐる三味線だが四絃でバチは使はない。この唱書妓一人とその師匠である曲先生といふのを連れて一夜でも三十分でも定価八円となつてゐる。その花代の高いこと驚く外はない。これで見ると内地芸妓は安売をする。すればこそ外国に発展して行けるのかとも推せられる。唱書妓はナカ／＼小奇麗、実物を見ると可愛い顔をしてゐる。〉

- (26) 石川寅治「台湾旅行」(金尾種次郎編『新日本見物―台湾樺太朝鮮滿洲青島之卷』一九一八・六、金尾文淵堂、四四―五頁)。

- (27) 『漢文台湾日日新報』一九〇七年二月二二日掲載の「名角角勝」には、台南市竹仔街醉仙樓の主人唐大漢が福州の名優五六名を台南に招き、旧正月に合わせて公演を打ったことが見える。

- (28) 福建省出身者が経営していた醉仙樓は数年前台南市民王象に譲渡されたが資力払底し昨年(一九二〇年)共同経営に乗り出した。しかし経営方針が安定せず損失が嵩んだため、今般出資者の一人蔡才に営業権を一任することになった、という内容。

- (29) 楊熾昌「台南的藝旦」(『聯合文學』一九八五・

一、七八頁）。

(30) 「醉仙閣」も例外ではない。例えば、一九二七年三月、江蘇省出身の放浪画家王亞南（一八八一～一九三二）を迎えて台南名士が盛大な歓迎会を開いたとき、会場に選ばれたのが「醉仙閣」で、その時の数多くの詩の応酬は『游台吟稿』（沈雲龍編・近代中國史料叢刊第九二輯収録、一九七三・五、文海出版社）にまとめられている。（毎思海上問芝田。身到瀛南俗慮蠲。畫意詩情活潑地。城堙石化奈何天。嘯吟有侶蒙投轄。山水無聲合鼓絃。多謝東君親密甚。陶然許列醉中仙。（醉仙閣酒樓）（王亞南「台南各界歡迎會即席」、二二頁）。

(31) 許丙丁「臺南教坊記」（季刊『臺南文化』一九五四・四、臺南市文獻委員會、一九〇三二頁）。

(32) 向麗頻「《三六九小報》〈花叢小記〉所呈現的臺灣藝旦風情」（『中國文化月刊』二〇〇一・一二、六四～五頁）。